



「性同一性障害(GID)を乗り越えて」

NPO法人 Japan GID

Friends 理事長

清水展人さん

私は、3人姉妹の長女、展子として生まれました。小学生の頃から好きになるのは女性、スカートを嫌いだズボンばかり履いていました。女友達と違うということに気付いていましたが、高校生になるまで、「これは誰にも知られてはいけないことだ」と思い、体への違和感や恋愛について、本心を誰にも相談できませんでした。その理由のひとつに、子どもの頃から「オカマ」など差別的な言葉が交わされ、もしかすると自分はいじめられるかもしれないと感じ、自分の悩みは誰にも言ってはならないと思っていました。

阿南市の花「ひまわり」の花言葉は、「光輝く」です。人権について考え守っていくことが、まさに光り輝く阿南市づくりにつながります。人権教育・啓発コーナー「ひまわり」では、市民の皆さまの人権に対する思いを掲載していきます。

高校に入学すると同時に今までの自分はおかしいと思ひ、女の子らしくなろうと決断し、大好きな服を捨てました。化粧用品を購入し女の子らしくなろうと努力し、男性とも交際しました。しかし、男性を好きになることはできず、自分はどうすればいいのかと悩みは深まる一方でした。

その頃、「3年B組金八先生」というドラマで、GIDの話題があり「これだ」と確信しました。今まで自分が何者か分からなかった私でしたが、これを機に、アイデンティティーが明確になりました。18歳の時に彼女ができ、友人や両親に声を震わせながら、カミングアウトしました。その後、病院でGIDと診断をうけ、母親は「なぜ、そのような険しい道を選ぶのか」と泣き、精神的に落ち込みました。父親は「そんな人の働ける場所はない。結婚もできない。一生、一人で生きていくのか」と社会の厳しさを説きました。手術、戸

籍変更、進学や就職について、考えれば考えるほど、不安に押しつぶされる日々を過ごしました。

そんな中、ホルモン治療により、体が少しずつ男性化していきました。体の変化に、喜びもありましたが、見た目が中性的になり電車の中や人ごみを歩くと足の先から頭までジロジロと見られるようになり、すれ違

いざまに見知らぬ人から「あいつは男？女？」「女でしょ」「いや、男だろう」と言われるようになりました。その言葉は、いつも私の心に突き刺さりました。気付けば私は、戸籍上は女性で氏名は展子ですが、見た目が男性化しトイレに行くにも躊躇、行きたくても、行けなくなっていました。女子として行ってきた、大好きなスポーツも行えないようになりました。電車に乗ると息が上がります。汗がダラダラと流れ、「私はこの世の中で、息もろくに吸えなくなってしまう。自分らしく生きよう」とすればするほど、母や家族を悲しませてしまっている」と感じ、こんな私は生きていても、社会の誰にも喜ばれない。何のために生まれてきたのだろう、と思いつめ自殺を何度も図ろうとしました。

2004年に性同一性障害特例法が施行され、要件を満たせば戸籍上の性別記載を変更できるようになり、私の生きる希望となりました。21歳まで女性として働き、貯金したお金

で海外で、手術を行いました。術後、裁判所で氏名、性別の変更を行い、新たに「展人」と名付け、戸籍上男性としての人生が始まりました。戸籍変更後も就職活動に苦労し「何のための戸籍変更だったのだろう」と悩む事もありました。

さまざまな逆境を乗り越え平成24年に結婚。現在は、今までの経験を生かし同じ境遇の人の力になりたいと、GIDなど性的少数者が生きやすい社会をめざして啓発活動を進めるNPO法人 Japan GID Friends (大阪府) を設立し理事長を務めています。性的少数者は、13人に1人いるといわれ、身近であるにもかかわらず、社会に受け入れられず自己否定感や孤独感、生きづらさを感じている当事者や家族が存在します。母は、「あの時、もう少し知識があれば、あれだけ落ち込まなかっただろう」と言います。ぜひ、多くの人に性的少数者に対する正しい知識を広げたいという想いで取り組んでいます。どうぞよろしくお願ひいたします。

問い合わせ

人権・男女参画課

(☎22-3094)へ

